

オーケストラ シンフォニカ 東京

第 34 回

定期演奏会

平成 5 年 4 月 19 日 (月) 午後 7 : 00 開演

サントリー小ホール



プログラム

第 1 部

指揮：石 黒 不二夫

陽	炎 (かげろう)	堀	清 隆
微	風 (そよかぜ)	武 井	守 成
踊	る 小 花	武 井	守 成
幻想的前奏曲	昂 (すばる)	赤 城	淳

第 2 部

指揮：家 城 孝 治

イタリア歌曲

ソプラノ独唱：須 郷 直 美

遙かなるサンタルチア	E. A. マ リ オ
オー ソレ ミオ	E. di カ プ ア
マ ン マ	C. A. ビ ク シ オ
帰れ ソレントへ	E. de ク ル ティ ス

[休 憩]

第 3 部

指揮：石 黒 不二夫

序曲	メリアの平原に立ちて	G. マ ネ ン テ
歌劇「ゴエスカス」・間奏曲		E. グラナードス
祭典曲	大いなる時	K. ヴ ェ ル キ

曲 目 解 説

第 1 部

舞曲：陽炎（かげろう）

堀 清 隆（1900～1986）

OST（タケイ）主催で行われた昭和2年（1927）第1回作曲コンクールに於て、鈴木静一の「空」井上繁隆の「セレーナード」と共に入選したのがこのバレエ「陽炎」で、大正13年（1924）秋の作で未完成のまま放置されていたのを、このコンクールの前に完成したものを。

初期の作品で、素直な如何にもマンダリン的な小曲故に、彼の作品の中でも最も有名で演奏される回数も多いが、本夕は原譜に忠実にマンダラ コントラルトを加えて演奏します。

微 風（そよかぜ） op.108

武 井 守 成（1890～1949）

昭和22年（1947）8月の作、同年11月から約1年間 NHK の深夜の最終放送「お休み番組」4曲メドレーの最後の曲として流された。ハバネラのリズムに乗ったさわやかな曲。

尚途中アレグレットの経過部8小節の繰り返しは、この曲より3ヶ月前に作られたギター曲「或る夜」op.106 の主題と同じであること……を付記して置きます。

踊る小花 op.14

武 井 守 成

原題は「机上の小花によす」、大正14年（1925）3月作曲、初期の代表作、昭和3年（1928）春全曲に亘って訂正し題名も「踊る小花」と改めて同年6月初演。

作者の解説によると……机上の花瓶にさされた可憐な小花を眺め、それが踊り出し、踊り疲れて倒れ、又踊り出す幻想を画いたもの。フレット楽器のスタッカート歯切れのよさを主眼としておる……とのこと。

幻想的前奏曲 昂（すばる）

赤 城 淳（1919～ ）

この曲を演奏するに当り、作者から次の様な解説を頂きました。

遠い昔、清少納言に……星は昂……と絶讃させたこの星は、冬の星座の王者オリオンの三つ星の右側に、淡い光を放っております。空気のきれいな所に参りますと、六つの星がごちゃごちゃと集まってかすかにまたゞき、私達に宇宙の無限と神秘をひしひしと感じさせてくれます。黙って見ていると私には、子供の頃見た百人一首の絵札に描かれた女官の十二単衣の裳裾を思い浮かばせ、あまつさえ かすかな衣擦れの音迄聞えて来る様で、幾晩も寒い夜空を見上げたものでした。

“心”そして“嵯峨野”と続いたプレクトラムと日本和声の結び付きに味をしめた訳ではありませんが、昭和45年（1970）春まとめ上げたものです。一つのテーマを何度もファンタジックに登場させ、その綾織の交点に第二のテーマが現れて曲を構成しております。同年作曲コンクールに入選した作品です。

第 2 部

イタリア歌曲

太陽から生まれて太陽のもとで育った様なカンツォーネ、そのメロディーの美くしさに酔わない人はいないでしょう。

子供の頃から誰もが親しんで来ている「オー ソレ ミオ」・「帰れ ソレントへ」からサンレモの新しい曲に至るまで、リズムやスタイルは違っても、それはどれも大らかで明るい美しくさに満ちたメロディーに支えられています。

カンツォーネの古里はいうまでもなくナポリです。一見ひなびた町ですが、海の青さは気が遠くなるほどよく澄んで、この土地には古くから美しい歌が沢山歌われ伝えられています。漁師が多く、その守護神ビエディグロッタのお祭りで、ナポリっ子は即興の歌を披露し、この のど自慢が歌祭りとなりだんだん芸術的なものになりました。又戦後行われたサンレモ・カンツォーネ・フェスティバルは国際的に有名で、レコード会社が一枚加わる様になってこの優勝歌は世界的に流行する様になりました。そして歌の内容も流行に乗ってロック・ビギン・ツイストとなりましたが、一貫して流れる美しいメロディーは今も昔も変わりません。

演奏する4曲は赤城 淳氏に依頼し新に編曲されたものです。

須 郷 直 美

1968年東京生れ。 1993年 東京芸大音楽学部声楽科卒業の新進ソプラノ歌手。

1992年 ロッシーニ生誕200年国際オペラ コンコロソに最年少で入賞（順位なし4名）、日比谷公会堂での受賞記念 ガラ・コンサートに於て、ミラノ・スカラ座芸術監督アルベルト・ゼツダ指揮により新星日響と共演。同年イタリア・ベネチアでのアカデミア・ロッジアーナでの研修に参加。

数々のオペラ、リサイタル、教会でのオラトリオ・讃美歌・黒人霊歌、NHK・FM 放送に出演して活躍中。上記アルベルト・ゼツダの外に新光光信・平田恭子・大谷冽子に師事。

第 3 部

序曲 メリアの平原に立ちて op.123

G. マネンテ (1867~1941)

マネンテは優れた軍楽長としてイタリア歩兵連隊に配属され、連隊の移動と自らの転属によりイタリア各地を転々としたと思われる。一時期彼の連隊はイタリア最南端のレッジョ ディカラブリアに駐屯したことがあったが、その北モンタルト山の山麓にメリアというギリシヤ系住民の集落があり、この高台は連隊の演習場となっていたといわれる。

この曲は戦闘を思わせる激しい部分と、対象的にゆったりとした美しいメロディーが交錯しておるが、平原での軍隊の戦闘訓練と地中海とシチリア島を望む風光明媚な景色は、マネンテにとり忘れ難い印象となってこの曲が構成されたと見られている。（参考資料：JMU 本部会報 No.85号）

この序曲は彼の代表作で1909年イル プレットロ誌の第2回作曲コンクールで81曲中第2位となった（因に第1位はアマデイの「海の組曲」）。尚彼の作品は400曲以上ありその大部分は吹奏楽であるが、この曲の外に「マンドリン芸術」「秋の夕暮」など数多くのMOの秀作も残している。

歌劇「ゴエスカス」・間奏曲

E. グラナードス (1867~1916)

スペイン・カタロニア生れのグラナードスは、若い頃からピアノ独奏者としてヨーロッパ中に高名を馳せスペインのショパンと讃えられたが、一方では郷土色豊かなピアノ曲を数多く作曲し、同時代のアルベニスと共に近代スペイン音楽の創始者とされている。

歌劇「ゴエスカス」は彼の代表作で、画家ゴヤ^{ゴッ}(1746~1828)の絵画と綴織りをモチーフとした18世紀スペインの恋物語りで、最初に着想された断片的な曲が20年後の1909年にピアノ組曲としてまとめられ、更に曲譜に歌詞がつけ

PROGRAM

られ（作詞者ベリケール）1914年歌劇の形を備えた。

第1次世界大戦の最中 1916年、ニューヨークのメトロポリタン劇場で初演され、それに立ち会う為渡米したグラナードス夫妻は、その帰途ドイツ潜水艦の雷撃を受け、船諸共大西洋上に不慮の死を遂げた。

この間奏曲は特に有名で独立して屢々演奏されている。

祭典曲 大いなる時 op. 18

K. ヴェルキ (1904~1983)
〔編曲 赤城 淳〕

ドイツ プレクトラム楽界の重鎮であったヴェルキは、1924年の処女作序曲1番から—— GROSSES MANDOLIN ORCHESTER ——（即ち木管・金管・打楽器を編成に付加し得る大マンドリン オーケストラ作品）—— を作曲した。この種のオリジナル曲は12曲あるが、その内の10曲は1933年までの10年間に集中して作曲されている。此等の作品はドイツ風の重厚なシンフォニックな響きと音色彩の豊かさで日本でも好評を拍し、半世紀以上経った今日でも演奏回数順位の上位を占めている曲も多い。

この曲は1933年に作曲された10番目の曲で、原曲はフルート・クラリネット・オーボエ・ファゴット・ホルン・トランペット・トロンボーンの7種の管楽器が加えられているが、今夕はフルート・クラリネットの2管に打楽器を加えた編成で演奏します。

加除式法規書・法令解説書出版

中央法規出版株式会社

本社 〒151 東京都渋谷区代々木2-27-4 電話(3379)3861(代表)
営業所 札幌・仙台・岐阜・大阪・広島・福岡

山本ミュージックコーナー

〒164 中野区東中野1-43-7 JR東中野駅東口南下車3分 TEL (3363) 9893

取扱品目

- ★ 手工マンドリン・ギター各種
- ★ 各社マンドリン・ギター
- ★ マンドリン・ギター用弦及附属品

お気軽にお立寄り下さい。

マンドリン教室

平山 英三郎 先生

ギター教室

平山 英三郎 先生

